

主の祈りの解き明かしを続けている。今日は12節の第五の祈り。

こういう主の祈りの解き明かしというのは、古今東西あらゆる説教者や神学者がなしてきていることであって、学ぼうと思えばいくらでも資料があります。そういう中で皆さんは、皆さんに与えられた牧師・説教者である私を通して、今ここでのライブな解き明かしを受けておられるわけですが、今日は最初に皆さんにお詫びしておかねばなりません。今日の私の解き明かしは、ある意味で非常に偏りのあるバランスを欠いたものになっていると思います。今日私は、今「誰かのことをどうしてもゆるせない」という思いを抱えておられる方に、御言葉の慰めが届いてほしいと願って、解き明かしの準備をしました。実際にそういう方がいらっしゃるのかどうかは知りません。私は、皆さんのプライベートを一から十まで把握しているわけではないし、把握したいとも思いません。だから、皆さんの心の中にどんな思いがあるのか、どんな傷があるのかなんて分かりません。でも、傷のない人は一人もいないということは良く知っています。だれもが、人に言えないような様々な痛みを持っています。そういう痛みを一つも味わわないで、年をとることなどできません。ですから、きっと皆さんの中には、「誰かのことをどうしてもゆるせない」という思いを抱えておられる方もいらっしゃることでしょう。そういう方が、魂の平安を得ることができるように。そんな祈りをもって、解き明かしをさせていただきます。

「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」

まず、負い目という言葉を見てみましょうか。これは、負債、借金ということですね。アラム語では、負債という言葉と罪という言葉が同じでして、ここでもその影響が強いのだろうといわれます。ですから、罪という風に言い換えていいのですが、神様に対する私たちの罪ということが「負い目、負債、借金」という言葉で表現されているということは大事ですね。神に借りてばかりで返せない。その逆に、神に貸すという言葉があるのはご存知でしょうか。**箴 19:17 弱者を憐れむ人は主に貸す人。その行いは必ず報いられる。**神の御心にかなう善行は、主に貸しを作る行為だとの大胆な言葉。でも、確かにそうやって貸しを作ることもできるのかもしれないが、残念ながら私たちは、神様に対して借金ばかりなのだというのが、聖書の示す人間観。少しくらいの貸しよりも、圧倒的な負債。しかもそれは、雪だるま式に膨れていく。年とともに、人間としての経験をつむほどに。悪に悪をかさね、どんどんかたくなになっていく。そういう私たちの膨れ上がった負債を、すべて無しにさせていただく、それが神による罪の赦しです。まことに凶々しいことですが、私たちはそうしていただかねば、誰もがその負債を返せぬままに永遠の滅びにいたるよりありません。だから、負い目を赦してくださいといつも祈り続けなさいと、イエス様は教えてくださっています。

そして問題は、この祈りの言葉に、こういう付け足しがあることです。「わたしたちも自分に

負い目のある人を赦しましたように」。これはどういう具合に受け取ればいいのかは、ずっと議論されていること。ここだけ読むと、自分が赦したということが先にあって、まるでそれが手柄のように神様の前にアピールされて、「だから、私の負い目も赦してください」と言われているよう。そんなことは決して赦されないというのは、聖書全体から明らかです。でも、かといって、ここで「赦しましたように」と書かれていることも無視できない。自分の赦しがすでになされたこととして示されているよう。どのように理解すればいいのか……。私には、まだ自分でこれと納得できる答えにたどりついていない、したがって皆さんにも確信をもって語るができないことをお詫びします。まだ、よく分からないのです。

ただ、はっきり確信をもって語るができるのは、「神様から赦される」ということと、「私たちが誰かを赦す」ということは、分かちがたく一つに結びついていて、けっして別々に分けて考えてよいことではないということです。今日は14節も一緒に読みました。ここまでは9-13節を読んできたが、今日は14、15節も読んだ。どうしてこの言葉が主の祈りのすぐ後に来ているのかということも色々議論があって、正直言ってこれもまだよく分からないのですが、一番オーソドックスな考えとしては、やっぱりこの14節というのは、今日の12節を補っているのであろうと言われる。ここでも、「もし、あなたが赦すならあなたも赦される」と、まるで条件が示されているようですね。どういう意図でイエス様がこのように言うておられるのか、ここについても私はまだ完全には納得できていないのですが、しかしここでも明らかなのは、赦されることと赦すことの密接な関係です。赦されている者は赦す者でもある。赦す者は赦されている者でもある。この両方は、絶対に分けて考えることができないのです。

この赦されることと赦すことの一体的関係は、聖書のほかの箇所からも明らかです。「無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦しあいなさい。(エフェソ4:31, 32)」コロサイ3:12からにも同じように、主があなたがたを赦してくださったように、赦しあいなさいという言葉があります。さらに重要なのは、マタイ18:21からの仲間をゆるさない家来のたとえです。「兄弟が私に対して罪を犯したのなら、何回赦すべきでしょうか」というペトロに問いが最初にある。その答えとして「七の七十倍までゆるしなさい」。その補足解説として、たとえ話がされている。1万タラントンという多大な借金（日本円で数千億円くらいに思っていたらいい、とても返せない金額）をしていた家来がいたのに、王様のまったくの憐れみでチャラにしてもらった。まさに「負い目を赦してください」との願いが聞かれたわけです。でもそうして赦された人が、仲間を赦さない。自分に対して百デナリオンというわずかな負債のある仲間を赦さないで牢屋に入れてしまう。それを耳にした王が心を痛められて、あれだけの大きな負債を赦されたのに、そんなわずかなことを赦さないとは何事だと怒ってしまう。ここに示されているのも、赦されることと赦すことの一体的関係です。本当に赦された者ならば、赦された喜びをよく知っている者ならば、必ず赦すことへと向かうのだ。これがイエス様の確信であり、また願いです。私たちみな、赦された者として赦すことに向かつてほしい。主はいつも、聖霊において、私たちにそのように導こうとしておられます。

しかし、私たちはそんな主の願いのままに生きることのできない、難しさを抱えています。聖霊は、私たちをそのような方向性の中で生かそう、つまり赦されて赦すという動きの中に生かそうとしておられる。でも、私たちの内なる罪は、全力でそれに抵抗しようとするのです。・・・赦すということは、本当に難しいことなのだと思います。どうしても赦せない、そういう思いを抱えておられる方がいらっしゃるかもしれません。それは、神の目から見て、あるいは他人から見て、確かに百デナリオンぼっちの小さなことかもしれない。そして、実は自分でもそのことを分かっているという方が大半でしょう。実は、負債といってもたかだか百デナリオンぼっちなのだ。自分が神に赦していただくという圧倒的な恵みを前にしては、そんなことでこだわっているのは決して正しいことではない。でも頭ではそう分かっているが、やはり赦せない。感情がどうしてもコントロールできない、あるいはもう状況的にこじれにこじれてしまって、赦すという行動に向かうことができない。

そういう私たちにとって、今日の祈りは重いのです。「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」このように口に出すことにためらいを覚えます。自分が、心ここにあらずで祈っていることを、自分でよく知っているからです。この祈りは、本当に重い祈りです。でも主は、このように祈りなさいと教えてくださいます。このようにして祈ることで、赦されて赦すという、聖霊の導こうとしている動きに私たちが巻き込まれていくことを願っておられるからです。私たちには、赦されることも、赦すことも、両方ともが絶対に必要であることを主は知っておられます。そこに私たちの魂の救いがあるのです。だから、赦され赦すという一つの流れの中に、自分も入ることができるように、祈りなさいと主は言われます。心ここにあらずでも祈り続けなさい。この祈りから逃げてはいけないと、示しておられます。

私たちは確認する必要があります。それは、赦すというのは、相手のためではなく、自分のためであるということです。イエス様が願っておられるのは、私たちが憎しみと恨みの泥沼から解き放たれることです。赦すというのは、相手の過ちを見逃したり、ひたすら我慢するなどということではありません。間違いは率直に戒めればいいのです。間違いは間違いだとただしつつ、でも裁きは主にゆだね、憎しみから自由になる。それが主の求めておられることのように思います。ルカ6:37から「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。許しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。」ここで言われている、裁くな、また罪人だと決めるなどというのは、あいつには永遠の滅びが値するなどあなたが決めようとするなどということであろうと私は解釈します。最終的な判断を下そうとするな。それは一方では、そんなことまでする資格はあなたにはないという、お叱りの言葉でありましょう。でも他方でそれは、あなたがそんなことまで背負わなくてよいのだ、考えなくてよいのだという、主のもっとも深いところでの憐れみを覚えさせられます。あなたは、そんなことに心奪われないで、もう憎しみから自由になりなさいと、言っておられるのではないか・・・。

人間を罪人だと決めること、永遠の滅びを与えると言明することは、決して人間にはできません。私たちにはできないことです。それをしようとするなら、必ず私たち自身も、滅びます。私たちは、だれかを裁こうとするならば、自分もまた必ず復讐の炎に飲み込まれていくよりないものです。そうして、神の道はずれ、御心から遠く離れて、醜い化け物のように、顔も心も変わっていくのです。イエス様は、断じてそれを望んでおられません。

今回、準備するにあたって、憎しみと恨みの泥沼の中で、本当にぼろぼろになっていた人が、イエス様の赦しの愛を知ること、少しずつ回復していかれたという証しの記録をいくつか読ませていただいた。その中で、母親に対して絶対的な憎しみを抱いて成長した女性の記録がありました。非常に壮絶な人生です。でもその人がたどり着いたのは、こういう境地でした。「イエス様は、罪を犯した人に対して、七の七十倍まで許しなさいと言われる。たしかに母親を赦さないと自分のほうが苦しむはめになる。いつまでも憎しみが尾を引いていることで、せつなくなり、生きていてもしかたないほどに惨めになっていくのだ。とは言っても、自分の力では赦せそうもない。それで教会で教わったように「イエス・キリストの御名によって、母親を赦します」と口に出して祈ることを何度も実行してきた。それによって、気持ちがだいぶ楽になった。イエス様は、こんな私を愛してくださり、十字架にかかって死んでくださった。それほどまでの犠牲の上に私は生かされている。それが分かってからは、もう過去を振り向くまいと思った。」

主は、いつも私たちを、こういう広々とした、陽だまりのようなところへ連れていこうとしてくださっているのだと思います。私たちを、そういう自由な場所へと連れて行くために、今日の祈りを教えてくださっているのでしょう。「わたしたちの負い目を赦してください。わたしたちもまた、自分に負い目のある人を赦しましたように。」先の女性が、「イエス・キリストの御名によって母親を赦します」と何度も口に出して祈ることで、聖霊の導きを少しずつ受け入れていったように、私たちも、赦せないだれかのことをしっかりと見つめながら、主の祈りを祈るのです。祈り続けるときに、聖霊は私たちは満たしてくださり、赦され赦すという大きな流れの中に私たちを巻き込んで、この心を広々とした場所に連れて行ってくださいます。

この祈りから逃げてはいけません。どうしても赦せない・・・ならば、そのままでいいじゃないですか。そのままでいいから、とにかく、この祈りから逃げないことです。その赦せない自分のままで、神の前に出て、イエス・キリストの御名によって祈るのです。「わたしたちの負い目を赦してください」どうか、十字架のイエス・キリストの血潮のゆえに、このわたしを赦してください。御心になわぬ者です。心の狭い者です、貧しい者です。憎しみに縛られてしまって、本当に惨めなのです。どうかこのわたしを赦してください。・・・赦せない自分のままで、神の前に出て祈るのです。主は必ずその祈りを聞き届けてくださって、十字架のイエスの愛で包み、すべてを癒してください。その赦された喜びから、新しい赦しの物語が始まります。

